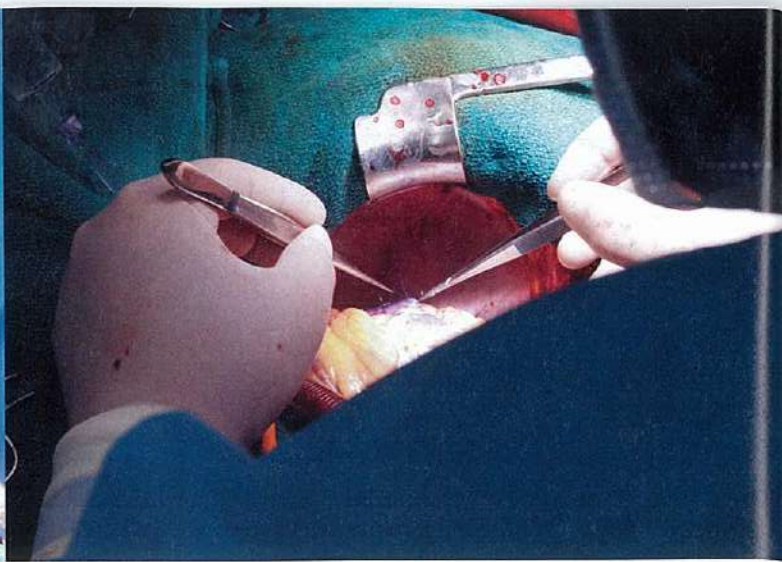




良いチームは手術時間も短から、患者さんに負担が少ない。



患者さんは他院でバイパス手術をしたが、再狭窄が起きて手術不能だと言われた。再手術可能な病院を探して、北海道からたどりついたという。側開胸でアプローチする大変難しいケースだ。



伊藤隼也  
Shunya Ito 也が行く

左側で足のグラフトを採取中の医師と右側でバイパス手術をする南洲医師の間に立つ深津さん。両者をあざやかな手さばきでサポートする。

vol.5

緊張感の漂う手術室。機敏な動作で医師に器具を受け渡す深津さん。そこにプロフェッショナルとしての美しさを感じた。

# 転載・二次使用禁止

Vol.5 オペナース兼コーディネーター

復帰後のギャップをどうやって埋めていたのですか？

深津 若い看護師に教えてもらったりして、少しずつ埋めていきました。

伊藤 後輩に教わることに抵抗感というか、変なプライドはなかったか？

深津 そんなの全然、ないですよ(笑)。

**心臓外科医南洲氏の言葉にスタッフが一致団結**

伊藤 南洲先生の初対面の印象はどうでしたか？ そもそも彼が屈指の心臓外科医ということは知っていましたか？

深津 いえ全く(笑)。当時は南洲先生もそれほど症例数はなかったです。

伊藤 南洲先生の手術を見たとき、どう思いましたか？

深津 最初に入ったのが、ミッド・キャブ(低侵襲冠状動脈バイパス手術)でした。南洲先生はやはり上手でした。

伊藤 当時は今ほどオペナースがいなかったと聞いていますが、そういう意味ではかなり忙しかったでしょう。

深津 重症の手術に27時間ぐらいかかっていたときは、手術後1、2時間手術室の床の上にタオルを敷いて仮眠し、起きたら定時の手術に出るといった無謀なスケジュールをこなしていました。それでも楽しかったですし、辞めたいと思いませんでした。南洲先生が「500例目指すぞ。800例目指すぞ」ってみんなに声をかけ、その言葉にみんながやる気になってい

## 「励ましの達人」。それが今の目標です

今回、伊藤隼也さんは大和成和病院(神奈川県大和市)のオペナースであり、患者さんの受診から退院までをサポートするコーディネーターでもある。深津より子さんに話を伺いました。

大和成和病院  
オペナース兼コーディネーター  
みかこ  
深津より子さん



昭和57年横浜市立大学医学部付属看護学校卒。現在の横浜市立医科大学附属市民総合医療センターに3年間勤務し、結婚と育児のため退職後5年間現場を離れる。平成8年から同病院でオペナースとして勤務。平成10年に看護部長、16年より現職。

ましたし。現場は活気つき、充実していました。心臓の手術という患者さんにとって生きるか死ぬかという場で不謹慎かもしれませんが、現場は活気つき、充実していました。

伊藤 現場の人間の意識がみんな同じ方向を向いているということは、大事ですよ。それがいい結果をもたらすと、僕は思っています。

**医師と患者、各科を結ぶ架け橋 新しいスタイルの看護師**

伊藤 オペナースに夢中になっていた矢先に、フィールドが広がったんですね。

深津 2年前から医療コーディネーターという仕事も兼務しています。

伊藤 具体的にはどんな仕事なんですよ。

深津 おもに南洲先生の手術を受けたという患者さんの受け付け業務や外来、手術のスケジュールのセッティング、家族の方の宿泊施設の予約、患者さんや家族への説明などを行っています。とくに患者さんや家族の話を直に聞くことを重視しています。具体的な内容を話していただくことで、緊急性が分かりやすし、外科よりも循環器内科の方が適しているケースかどうか判断できます。

伊藤 深津さんはトリアージも行っているんですね。

深津 そうです。

伊藤 やはり患者さんから直に話を聞

子育てを経て、看護師に復職若い看護師に教わることも

伊藤 僕も取材のためよく手術室に入りますが、機敏に医師に器具を渡している深津さんの姿は、本当に凛としていて、オーラのようなものさえ感じます。大和成和病院に来てどれくらいなんですか？

深津 10年目です。南洲先生が来る10日前に来ました。今の病院からは想像がつかないでしょうが、当時は小さくて汚い手術室があるだけで、まるで野戦病院のよう。ここで本当に心臓の手術するんだらうかと、不安でした。

伊藤 オペナースになったきっかけは？

深津 最初の病院でたまたま配属されたのが手術室だったから。単純ですね。

伊藤 経歴から見ると、深津さんは復職組ですね。戻ってきたてもオペナースをするあたり、やはり好きだったんですね。

深津 看護師になって3年目の、仕事がおもしろくなってきたころに辞めたので、休職中も夢で自分が器具を渡していたり(笑)。ただ、子育てをきちんとしたいという気持ちがありましたから、それが一段落してから復帰しても遅くないと思っていましたし、そのおかげで子育てに集中できました。5年後に復帰したときはあまりにも医療の進歩に驚きました。

伊藤 今、看護師の復職が問題で、看護連盟などが、そうした潜在ナースの掘り起こしに尽力しています。深津さんは



の目標です。

伊藤 「励ましの達人」ですか、いい言葉ですね。僕もいろいろなインフォームドコンセントに立ち会うけれど、「大丈夫」「安心して」など、言葉にあまり具体性がないんです。深津さんの言ったとおり、手術室に入ったらどんな手順でどんなことが行われて、その後どういったことになるのか、懇切丁寧に説明してくれたら、患者さんの心の中にスーッと入っていくと思います。

深津 オペナースは事前のオリエンテーションで患者さんに手術の説明をするわけですが、その時は分かった気になっていても、後になって「こんなことも聞きたい、これも知りたい」と言ってくる患者さんも多い。そのときは病棟の看護師も説明しますが、手術を知る人が話すと、患者さんの顔が聞く前と聞いた後で全然、違う。合点がいった顔になるんです。

**超えて、開けて、達成感が得られる**

伊藤 最後に、復職と仕事内容の変化という2度のチャレンジを経て、今に至るわけですが、看護師という仕事に達成感がありますか？

深津 ありますが、そのニュアンスが違ってきています。オペナースのときは時間が限られているから、やり逃げたという達成感があります。一方でコーディネーターという仕事は、ルーズで時間の枠にとられない。メリハリがない。こういう仕事のスタイルがどうしても受け入れられず、悶々としたときもありました。患者さんの「あのとき深津さんが対応してくれたから、今がある」と言われて、ものすごく励まされました。それが達成感につながっています。


伊藤 達成感がないと仕事が続けられないと思うのですが、どうですか？

深津 確かに本当の達成感、仕事のおもしろさを知らない人は辞めてしまう。オペナースの新人は手術室で必ず泣きますが、そこを超えないと、開けない。達成感が得られないんです。実際、辞めたって言うってきた看護師が今、充実感を持ちながら手術室にいる姿を見ている。やっぱりある時期を超えないと開けないということでしょう。

伊藤 その達成感を持ち続けて、今の仕事を続けていくって、今日はどうもありがとうございます。

なごみ あきひろ  
心臓外科医 南淵 明宏氏より

深津さんと一緒に仕事して感じるの、人間ってすごく興味を持ってもの、おもしろいって思えるものに出会うと、本人が元来持っている能力以上のものが開花するということです。深津さんの場合、看護師としてのスキルはもちろん十分持っていますが、単にそれだけでなく、手術室での仕事、あるいは患者さんをコーディネートする仕事をとてもおもしろがってやっている。まさに「水を得た魚」のようです。その姿勢が周りにとってもよい影響を与えていると思いますし、私たちもそういう看護師と一緒に仕事をするのは、いい意味で刺激になっています。




伊藤隼也 (いとう しゅんや)  
写真家・医療ジャーナリスト  
患者中心の医療を実現するための医療ジャーナリストとしてテレビや雑誌などのメディアで活動中  
ホームページ shunya-ito.tv

「専門性を生かした、こんな看護師さんが増えて行くといいな」と僕は感じた。

# 転載・二次使用禁止



## Vol.5 オペナース兼コーディネーター

くつていうことは、大切ですか？

深津 大切です。先方が「冠動脈が3本悪い」と話してきたら、「根元の方と言われてませんか」と聞きます。そうすると「そうそう、根元の方が95%細いと言われた」というような返事が戻ってくるわけです。そういう具体的な話が急いだから良いか否かの判断になるんですよ。

伊藤 話している患者さんの呼吸からも、切迫感が分かりますよね。

深津 ええ。だからどんなに忙しくてもお電話で話をします。

伊藤 そうすると、深津さんは多忙きわまりない心臓外科や循環器内科医の目の届きにくい部分を補っているわけですね。医師と患者さんとの接点にもなっているんですね。

深津 うちの医師は本当に忙しいので、患者さんと話す機会を作りにくい。看護師が架け橋になることで、その部分が解消されます。本当に緊急度の高い患者さんはこちらで勝手に時間外でも来てもらい、直前になって医師に「今、こういう患者さんが来ていますので、よろしくお願いします」と言うこともあります。

伊藤 横断的に病院の中を見たり、ハートセンター内の各部門調整をしたり、まさにスーパーナースですね。

**手術室での経験を生かし 病棟へ足を運ぶことの意味**

伊藤 オペナースは手術室の患者さんしか見ないから、その人の人となり、病気の背景まではなかなか見えにくいですよ。

深津 外科医にとっては、専門のオペナースがいることは、ものすごく理想的なんです。ただ、いち看護師からすると、手術のサポートができるだけでは看護師としては不十分だと思います。だから手術室である程度経験を積んだら、患者さんに接する病棟にかかわるといいですね。病棟で患者さんを観察したり、話し方や振る舞いを覚えたり、薬や治療法を学んだり。これは両方を経験して初めて分かったことですね。

伊藤 手術室では見られなかった患者さんの様子、つまり手術の舞台裏が見えるようになるということですね。実際、深津さんは患者さんに対する思いも変わってきたんでしょうか？

深津 ガラッと変わりました。この病院にいるほとんどが心臓の手術を受ける患者さんですが、手術を迎えた日の患者さんの精神状態は本当にすごい。腹を決めているのがこちらにも伝わってきます。それが分かったからこそ、患者さんの不安が少しでも解消されるように、手術の内容や手順を患者さんがイメージできるように、具体的に話すように心がけています。オペナースで培った経験がここで生きてくるわけです。あとは、「励ましの達人」になること。これが私の今の目標です。



ナイチンゲールは看護を「細々とした事」と表現した。コーディネーターは患者さんの全背景を知った上で「細々とした事」をこなすことと深津さんは言う。